

赤狩り旋風と映画

坂 本 仁

一九九九年三月二日、映画の祭典、アメリカ合衆国ハリウッドの第七一回アカデミー賞授与式では、通例と異なる光景が見られた。この年、映画界に対する長年の功労を祝して、エリア・カザン（一九〇九―二〇〇三）に「名誉賞」が贈られた。ところが居合わせた関係者の反応は複雑なものであった。こうした式典の場合、通常ならば、皆が立ち上がって心から祝福を表明するものだが、事実そうしたものも大勢いたが、中にはブーイングを浴びせるもの、着席したまま拍手のみに留めたもの（ステイヴン・スピルバーグやジム・キャリー）、笑みも浮かべず無言の抗議をするもの（ニック・ノルティやエド・ハリス）なども見受けられた。⁽¹⁾理由は、「赤狩り」時代にエリア・カザンが取った行動を忘れていない映画人が多くいたからである。

この事例だけでなく、アメリカでは、一九九〇年代になって「赤狩り」(Red Scare)ないし「マッカーシズム」(McCarthyism)の問題が話題になり、関連する映画作品もいくつか作られるようになった。「赤狩り」自体は、それより四〇年以上も遡る一九四〇年代後半から五〇年代の出来事であったが、アメリカ史の暗部として長らく伏せられ、言及されることは多くなかった。とりわけ映画作品として取り上げられることは極めて少なかった。二〇

世紀末になってようやく、米国人も「赤狩り」の問題に向き合う必要性を感じるようになった、ないしは、そうすることが許される状況が整った、と言うべきなのだろう。それだけこの問題の根は深い、と言わなければならない。本稿では、まず、「赤狩り旋風」の歴史的背景を振り返り、次にこの問題に触れた映画作品を検証することにした。

一 歴史的背景

アメリカ合衆国は、一九世紀末に工業生産高でイギリスを抜き、世界一の地位を獲得した。その国力に応じ、世界の中心的な役割を果たすに及び、二〇世紀は「アメリカの世紀」とまで呼ばれるようになる。しかし、アメリカが単独で世界に覇を唱え得たわけではなく、次第にソヴィエト社会主義連邦共和国（ソ連）や中国が勢力を増し、二極ついで三極の覇権争いが繰り広げられる。自由主義体制と社会主義ないし共產主義体制という統治形態の異なる陣営のつばぜり合いである。いずれも第二次世界大戦の終了前後に核兵器を保有（米国一九四五年、ソ連四九年、英国五二年、仏国六〇年、中国六四年）し、西側と東側に分かれて睨みあい、「東西冷戦の時代」（一九四五―八九）を迎えたのである。⁽²⁾

アメリカは、イギリスやフランスなどを交えた西側の雄として、共產主義諸国から「自由を守る」という大義をかかげ、一九五〇年六月に始まる朝鮮戦争、一九六二年一〇月のキューバ危機、ついでヴィエトナム戦争（一九六〇～七五）に関与し、東側ソ連や中国と積極的に対峙した。この間、世界中が核兵器の脅威に怯える「冷戦」の名のもとに、アジア、中米、近東などいくつかの地域で、東西大国の代理戦争が展開された。冷戦下の「熱い戦い」

である。この冷戦が終結するまでの間、西側諸国とりわけ米国では、共産主義者やその同調者への脅威や敵意が語られた。

(1) 非米活動委員会 (H U A C) と連邦捜査局 (F B I)

アメリカ合衆国の「共産主義に対する脅威」は、早くも第一次世界大戦後、組合活動などに対し、政治家や事業主などの間で顕在化し、「赤狩り」の風潮が醸成された。しかし、一九二九年に始まる大恐慌時代や第二次大戦中のいわば国家総動員体制の時代には、組合活動の制約や共産主義的考えの抑圧的風潮が強まり、人々の間の脅威そのものは比較的沈静化した。ところが大戦後の復興期の過程で、ソ連や中国などの東側共産主義国の興隆と結束に伴い、米英を中心とする西側自由主義圏の政治家やジャーナリストの口から、共産主義への脅威が必要以上に喧伝されるようになる。米国内における「第二次赤狩り」である。⁽³⁾この活動で、大きな役割を演じたのが「非米活動委員会」と「連邦捜査局」である。

第二次世界大戦中の一九三八年、アメリカ合衆国連邦議会の下院に、国内のファシスト摘発を目的とした特別委員会として「非米活動委員会」(The House Committee on Un-American Activities, HUAC) が設置される。戦争が終結し、冷戦時代に入った一九四五年、同委員会は特別委員会から、常設委員会となる。その主要な役割は、ファシスト摘発から国内のスパイ活動摘発すなわち共産主義者の追及となる。これが「赤狩り」である。ついで六〇年代以降のヴェトナム戦争期、国内では戦争をめぐる賛否両論に割れる中、同委員会は一九六九年に「国内治安委員会」と改称され、デモや騒乱状態の監視に目を光らせることになる。やがてヴェトナム戦争後の一九七五年、同委員会もついに廃止され、その管轄事項は、下院の司法委員会が継承することになった。⁽⁴⁾その間、非米活動委員

会は、国内状況に呼応する形で、ファシストや共産主義者の摘発、公民権運動の活動家やヴィエトナム戦争反対者の取り締まりなどへと、主要な活動目的や名称を変えながら、「「非アメリカ的」活動や人物を調査する」権限行使したのである。

大戦後、非米活動委員会(HUAC)が常設委員会となり、アメリカ二〇世紀史に汚点を残すことになるのが「赤狩り」である。連邦政府は民主党政権下にありながら、同委員会は、野党の共和党保守派が指導権を握り、ハリ・トルーマン大統領が共産主義者の破壊活動を許している、と攻撃し始める。この攻撃や摘発の標的とされたのが、公務員や技術者、ならびにハリウッドの映画産業である。ハリウッド関係者については後で述べることにして、まず当時、世界的に話題となった、アルジャー・ヒス取り調べやローゼンバーグ事件を簡単に見ることにしよう。

一九四八年八月、非米活動委員会は、フランクリン・ルーズヴェルト大統領の側近でもあった国務省の元高官アルジャー・ヒス(一九〇四〜九六)を秘密漏えいの疑いで取り調べた。ヒスが機密文書をソ連のスパイに手渡した嫌疑である。それが何と一〇年前の一九三〇年代のことで、スパイ告発の時効をとうに過ぎている。このため同委員会は、容疑を否認するヒスを偽証罪で告訴したのである。ディーン・アチソンやアンドルー・ステイヴンソンなど著名な政治家がヒスを擁護したが、一九五〇年、二度の裁判で結局有罪となり、ヒスは五年の刑を受けることになった。この時の取り調べで活躍したのが、当時、議員一期生のリチャード・ニクソンであり、以来彼は、共和党の有力政治家として頭角を現すことになる。⁽⁵⁾(その後、ヒスは、一九九二年に無罪とされたが、近年では、「ヴェノナ文書」という当時の資料が公開され、ヒスが長年スパイ活動を行っていた事実が明かされている。)

非米活動委員会と歩調を合わせる形で「赤狩り」に力を発揮したのが、「連邦捜査局」である。これはもともと、

セオドア・ルーズベルト政権の一九〇八年七月に、司法省内に設立された数人規模の「捜査局」(Bureau of Investigation, BOI) に過ぎなかった。やがて時代情勢に応じて、その必要性が強調され、一九三五年七月、現在の「連邦捜査局」(Federal Bureau of Investigation, FBI) となり、その規模を一千人以上に拡大した。(二〇〇七年現在の職員総数は三万人を越えている)。活動は「テロ・スパイなど国家の安全保障に係る公安事件、連邦政府の汚職に係る事件、複数の州に渡る広域事件、銀行強盗など莫大な被害額の強盗事件など」を担当する⁽⁶⁾。ただしFBIは捜査機関であり、起訴をおこなう検察権はない。この捜査局に長官として君臨したのがジョン・エドガー・フーヴァー(一八九五―一九七二)である。彼は、一九二四年五月一〇日に二九歳の若さでその地位を任され、以後四八年間、綱紀の肅正を徹底し、「一九三〇年代のギャング狩り、第二次世界大戦中のスパイ摘発、冷戦期以降の政治活動家の調査(マッカーシズムによる、いわゆる「赤狩り」など)、時代の要請に応じた様々な活動を指揮した。

このFBIは、第一次世界大戦後の「赤狩り」でも存在感を示したが、「第二次赤狩り」の著名な捜査が「ローゼンバーグ事件」である。この事件は、ソヴィエト連邦によるスパイ活動の摘発である。一九五〇年六月、クラウス・フックスというドイツ出身の核科学者がFBIに逮捕される。この捜査が発端となり、ジュリアスとエセル・ローゼンバーグ夫妻が、機密情報をソ連に漏洩した容疑で逮捕される。エセルの実弟デイヴィッド・グリーンングラスが、第二次世界大戦中に、ロスアラモスの原爆製造工場で働いていた折、原爆製造方法などを入手し、ローゼンバーグ夫婦が、その情報をソ連に売り渡した、というのである。FBIに逮捕されたグリーンングラスの自白供述が決め手となったのだが、裁判にかけられたローゼンバーグ夫妻は、一貫して無実を主張。この事件をめぐる、サルトル、コクトー、ピカソ、アインシュタイン、ロバート・オッペンハイマー、ハロルド・ユリー、ネルソン・オルグレン、ブレヒトなど、当時の世界の著名人が除名活動を展開した。しかし、ローゼンバーグ夫妻には、一九五

一年に死刑判決が下され、一九五三年六月に処刑された。⁽⁷⁾（この「ローゼンバーグ事件」も、アルジャー・ヒスの場合と同様、近年ではスパイ活動の事実が明かされている。）

こうした共和党主導の非米活動委員会（HUAAC）やFBIの動きを受けて、民主党のトルーマン政権も、共産主義者の攻撃に歩調を合わせることになる。狙いはふたつ、まず、一九四七年三月一二日に行った、議会へ向けた特別教書演説「トルーマン・ドクトリン」に対する国民の支持を取り付けること。これは、共産主義の封じ込め政策とギリシャ内戦（一九四六年―一九四九年）などの反共支援という外交政策である。もうひとつは国内に向けて、共和党からの批判をかわす対策である。一九四七年、大統領は連邦公務員に対する「赤の踏み絵」ならぬ「忠誠」審査を開始し、従わないものは、解雇や辞職に追い込んだ。その結果、「一九五一年までに、二二二人が解雇され、二〇〇人以上が辞職した」⁽⁸⁾という。

政府のこうした方針を根拠づける形で、一九五〇年、破壊活動取締を目的とする「国内治安維持法」（通称マッカーラン法）が議会にて承認される。これはマッカーラン上院議員が提案したもので、実質的に、「共産主義的団体とその構成員の登録制、防諜法の強化等、反共体制確立」⁽⁹⁾を目指すものであった。しかし、その内実は自由な考えを制約する思想統制の恐れがあることから、議会でも賛否両論が拮抗した末に、かろうじて成立した法律である。だが、同法成立後は、共産主義政治団体は、すべて政府に届け出が義務付けられ、国内の共産主義者は、軍事産業で働くことも許されず、旅券も発行されなくなり、海外の「共産党」の党員は破壊的活動組織であるとして、ヴィザの発行を認めないこととなった。⁽¹⁰⁾

こうして、アメリカ政府、議会、連邦捜査局など国家の統治機関が一丸となって、共産主義に対する忌避的風潮を強化したのである。

(2) 「マッカーシズム」とハリウッドの赤狩り

そんな時代情勢の中に登場したのが、ウィスコンシン州出身の共和党上院議員ジョセフ・レイモンド・マッカーシー (Joseph Raymond McCarthy, 1908-1957) である。彼は、一九五〇年二月、ウェスト・ヴァージニア州ホイーリングで開かれた共和党婦人クラブの演説中に、「二〇五人の共産主義者が国務省職員として勤務している」と告発した。数週間後には、国務省ばかりでなく、他の部局にも非難の矢を放ち、彼は一躍メディアの注目を浴びることになった。一九五二年の選挙の受けを狙ったものであろうが、冷戦下の人々の漠然とした不安に訴える形で、その目論見は見事に功を奏し、マッカーシーは首尾よく再選を果たした。また同年、長年続いた民主党から、共和党のドワイト・アイゼンハワーが大統領として選出され、上院も共和党が多数を占めるに及び、一九五三年にマッカーシーが院内特別小委員会の委員長に就任することになる。

マッカーシーは、その職権を利用して政府や国内の「共産主義者」の一掃に着手する。彼の「共産主義者攻撃」(赤狩り)は、一九五〇年から五四年までの四年間続いた。その間、有名な政治家、作家、映画関係者などが次々と喚問され、公職を追放されたり、活動の場を奪われたり、発言の機会を封じられたりした。非難の矛先が向けられた著名な人物には、元国務長官ジョージ・マーシャル、ディーン・アチソンなどの政治家、ベルトルト・ブレヒトやダシル・ハメット、アーサー・ミラーなどの作家、チャルズ・チャップリン(一九五二)やリリアン・ヘルマンなどハリウッドの映画関係者などである。こうして吹き荒れた「赤狩り旋風」のことをその名にちなみ「マッカーシズム」(McCarthyism) とこ⁽¹²⁾う。

マッカーシー自身は、しかし、一九五四年の春に、追及の的を軍隊にまで広げたことにより、墓穴を掘ることになる。公聴会の模様がテレビで報道されると、二〇〇万人のひとが視聴し、彼の根拠薄弱な非難を見て、無責任

だと感じた人々が、次第に彼の主張から離れた。数カ月後、上院は彼の非難決議を行い、マッカーシーはその職責を解かれ、三年後にアルコール中毒で他界する⁽¹³⁾。

ところで、ハリウッドの「赤狩り旋風」は、マッカーシーが脚光を浴びる以前から始まっていた。一九一一年、雨の多い東海岸から、好天に恵まれる西海岸ロス・アンジェルス郊外のハリウッドに、「ネスター・スタジオ」を始めとして、パラマウント、ワーナー・ブラザーズ、ユニヴァーサル、フォックス・フィルムなど、映画製作会社のスタジオが集結する。ハリウッドの映画は、芸術路線を主導するフランスに対し、娯楽作品を提供することで人気を高め、初期の一九一〇年代から一九三〇年代、四〇年代のハリウッド黄金期を築き上げ、二〇世紀アメリカの一大産業に成長し、一九五〇年代には、映画業界において世界の頂点に君臨するようになる。

実は、映画というショービジネスの中心には、ユダヤ人が多くいた⁽¹⁴⁾。アメリカ社会は、植民地開拓の先陣を切ったアングロ・サクソン系の白人プロテスタント (WASP) が国家や産業の中軸を占めてきた。東欧などから遅れてやってきたユダヤ系移民が、活動の場を見出したのは、金融業やショービジネスの分野であった。支配層の WASP から見ると、後からきたユダヤ人は、異なる宗教を信奉し、金融業などで勢力を伸ばしており、黒人に次いで疎ましく、「非アメリカ人」として排斥したい対象と目された。ユダヤ人迫害は、ヨーロッパや中東だけでなくアメリカにあっても繰り返された⁽¹⁵⁾。加えて、ユダヤ人映画関係者には、思想や宗教にとらわれず、自由な気風を抱き、共産主義的な考えに同調する者が多くいたため、彼らは非米活動委員会から格好の標的とされたのである。

一九四七年一〇月、「非米活動委員会」はハリウッドの映画関係者を「聴聞会」に召喚し、事情聴取を開始する。呼び出しを受けた中で、今に語り伝えられるのが「ハリウッドの一〇人」である。ハーバート・ビーバーマン（製作者、監督）、エドワード・ドミトリク（監督）、エイドリアン・スコット（製作者、脚本家）、アルバ・ベッシー（脚

本家)、レスター・コール(脚本家)、リング・ラードナー・ジュニア(脚本家)、ジョン・ハワード・ロースン(脚本家)、アルバート・マルツ(脚本家)、サミュエル・オルニッツ(脚本家)、ドルトン・トランボ(脚本家)。彼らは皆、脚本家か映画監督であり、その中の六人がユダヤ系であった。⁽¹⁶⁾ 彼らは、「ハリウッド・ブラックリスト」と呼ばれる、過去に共産主義思想を持っていたか、もしくは共産主義者と関係があった者としてリスト・アップされていた。彼らは聴聞会に先立つ会合で、「憲法修正第一条」に定める「言論の自由」を根拠に、共産主義者であるか
 いなかの質問に対する回答を拒否することに決めていた。⁽¹⁷⁾ しかし、同委員会はその回答を議会侮辱罪に当たるとしてワシントン連邦地裁に告発した。その結果、一〇人とも六ヶ月から一年の実刑判決を言い渡されたのである。⁽¹⁸⁾

その他、リストに記載されていた著名人は、チャーリー・チャップリン、ジョン・ヒューストン、ウィリアム・ワイラー、オーソン・ウェールズなどである。この喚問を契機に、アメリカ人に止まらず、ブレヒトなど外国人の関係者を含む都合三〇〇人以上の者が、活動の制約やハリウッドからの締め出し、さらには国外退去(チャーリー・チャップリンやオーソン・ウェールズ)などの被害を受けることになった。

すべての国民がこのような動きを黙認していたわけではない。「非米活動委員会」による「赤狩り」ないし「レッド・ページ」(red purge)は、合衆国憲法の「権利章典」と称される修正第一条の「自由な思想を制約してはならない」との規定に抵触するとして、多くの人々が反対運動を起こした。著名な俳優では、ダニー・ケイ、ジュディ・ガーランド、ヘンリー・フォンダ、ハンフリー・ボガート、グレゴリー・ペック、カーク・ダグラス、バー
 ト・ランカスター、フランク・シナトラ、キャサリン・ヘパバーン、ベニー・グッドマンなどがいた。⁽¹⁹⁾

その一方で、「非米活動委員会」の方針に積極的に賛同したり、自らの保身のために転向したりする者もいた。彼らは「ハリウッド・ブラックリスト」作りに協力することになる。多くは保守主義者か、その同調者である。そ

の中の著名な顔触れは、ウォルト・ディズニー、ゲーリー・クーパー、ロバート・テイラー、ロナルド・レーガンなどである。とりわけレーガンは、積極的な告発者として、リスト作りに協力したという。⁽²⁰⁾ また、この時期保身のために共産主義思想の持ち主の名前を告発し、後年、後ろ指を指されることになる映画監督がエリア・カザンである。⁽²¹⁾

「非米活動委員会」でマッカーシズムを主導したのが共和党であったことから、これ以降ハリウッドには、根強い保守・共和党への不信任が生まれ、現在でも映画人の間では、民主党支持者が多くを占める要因になっている、と言われている。

(3) マッカーシズムへの反省―一九九〇年代

マッカーシズムは、一九五四年のマッカーシーの失脚ののち、六〇年代の初めころには弱まりを見せる。アメリカ社会は、次第に、「赤狩り」から人種問題の改善に向けた、公民権運動が高まりをみせる。やがて、ヴィエトナム戦争が始まり、アメリカ社会は動乱の時代を迎える。しかし、世界は、依然として東西の冷戦状態にあり、「赤狩り旋風」は沈静化しても、アメリカの体制は、反共産主義が継続する。一九六三年のケネディ死後、政権を引き継いだ民主党のリンдон・ジョンソンは、公民権運動で高い評価をえたものの、ヴィエトナム戦争では戦闘を泥沼化させたとして、実績評価は相殺された。代わって共和党のリチャード・ニクソンが大統領（二九六九〜七四）に就任。彼は一九七二年に発覚した「ウォーターゲート事件」で失脚するものの、フォード、レーガン、ブッシュと共和党の保守政権が一九九三年まで続き、「赤狩り」の反省は封印される情勢にあった。

とりわけ五〇年代に、非米活動委員会で頭角を現したニクソン、「ブラック・リスト」作りに貢献したハリウッ

ド人ロナルド・レーガンなどが、七〇年代～八〇年代に大統領として君臨する状況下では、赤狩りの実情開示は望み薄であった。一九六六年に、情報公開法が制定されたが、めぼしい情報は開示されることはなかった。一九七二年、永年FBIの長官を務めたフーバーが亡くなり、情報の公開が期待されたが、一九八〇年代のロナルド・レーガン政権（一九八一～八九）下では、大統領行政命令により、一九八二年四月と一九八六年一〇月の二度にわたり、情報公開に制限が加えられた。

マッカーシズムへの反省は、学問研究分野では地道に始まっていたが、赤狩りへの反省が取りざたされるようになったのは、やはり、冷戦の終結を迎えることができたからである。一九八九年十二月、地中海のマルタ島で、ソ連の第八代最高指導者ゴルバチョフと米国の第四十一代大統領ジョージ・H・W・ブッシュ東西両巨頭が会談し、冷戦の終結を宣言した。その二年後の一九九一年十二月に、ソ連が解体し、共和党ブッシュ政権（一九八九～一九九三）は、湾岸戦争において勝利を収め、アメリカが単独覇権を謳歌するかに思われた。しかし同政権は、米国内の経済情勢が思わしくなく、財政が逼迫したため、民主党ビル・クリントン政権（一九九三～二〇〇一）に交代することになる。この九〇年代に、ようやく冷戦下の情報がいくつか開示され始める。たとえば、一九九五年に「ヴェノナ計画」(Venona Project) と称される、英米の情報機関が一九四三年～八〇年まで協力して行った、対ソ連の暗号解読を任務とした活動実態を示す資料がそれである。⁽²³⁾これにより、アルジャー・ヒス取り調べの妥当性やローゼンバーグの有罪性が明らかとなったが、秘密のヴェールに包まれていた時代には、赤狩りへの疑念を払拭することはできなかった。

この一九九〇年代に、軍事裁判、レイプ事件、黒人問題、企業裁判など多くの法廷劇映画が製作される。しかし、強権発動により、公務員、ハリウッド映画人、知識人を疑心暗鬼に追い込み、職場からの追放や活動の停止、果て

は逮捕・処刑にまで発展し、多くの人々を精神的・社会的に苦しめた「赤狩り」をめぐる問題は、戦後米国の恥部の一つとして永らく封印されていた感がある。とりわけこの問題が映画作品として取り上げられることはあまりなかった。それだけハリウッド映画界に及ぼす影響が大きかったのである。それでも少ないながら、この問題に對峙する作品が制作されてきた。次に、マカーシズムをめぐる問題を取りあげた映画作品を見ることにしよう。

二 関連する映画作品

「マッカーシズム」をめぐる問題を映画やTVドラマとして取り上げた作品で、めばしいものを時代順に挙げれば、以下のようになる。

『追憶』(*The Way We Were*, 1973)、『ハリウッドに口付け』(*Postcards from the Edge*, 1990)、『真実の瞬間(とき)』(*Guilt by Suspicion*, 1991)、『テレビ映画』シチズン・コーン／赤狩り・マッカーシーの右腕と呼ばれた男』(*Citizen Cohn*, 1992)、『クルーシブル』(*The Crucible*, 1997)、『マジェスティック』(*The Majestic*, 2001)、『グッドナイト&ベッドラック』(*Good Night. And Good Luck*, 2005)、『インディ・ジョーンズ／クリスタル・スカルの王国』(*Indiana Jones and the Kingdom of the Crystal Skull*, 2008) などである。

この中で、「マッカーシズム」に真っ向から対峙した真摯な作品は『真実の瞬間』である。この作品は、聴聞会に関するものであり、次節で扱うことにする。また、『マジェスティック』と必ずしも法廷劇ではないが、直接この問題を取り上げた作品『グッドナイト&グッドラック』も同じく次節で扱うことにしたい。

(1) シドニー・ポラック監督『追憶』(The Way We Were, 1973)

これは一九三七年の春から二〇年に亘り、大学の創作科で出会った男女の交情をつづつたものである。作品の前半で、「マッカーシズム」の影響が取り上げられる。ハリウッドで脚本家として仕事を始めた男性ハベル（ロバート・レッドフォード）は、身近な知人などが「赤狩り」に巻き込まれ、映画人として自由な表現を封じられる情勢となると、戦闘的な反対運動に背を向け、微温的な恋愛物語を書くことで生きようとする。対するユダヤ系アメリカ人の主人公ケイティー（バーブラ・ストライザンド）は、抑圧の歴史を背負っている精か、創作活動に飽き足らず、政治集会などに参加し、より積極的かつ直接的な反対行動に向かう。彼女は、捕えられ、刑務所を出たり入ったりするものの、政治活動に執心する。ハベルの方は、逮捕される脚本家らの報せに接し、ハリウッドを去り、結婚し、ニューヨークなどで人気脚本家として活躍する。ケイティーもやがて東海岸に活動の拠点を移すが、依然として政治活動を続け、演説やビラ配りなどで市民に反戦運動の訴えを呼び掛けている。時を経て再会した二人は、懐旧の情が交錯するものの、歳月の隔たりの中で、お互いの過ごしてきた超え難い経底を感じ、それぞれの道を歩む。

この作品は、必ずしも「赤狩り」の時代批判を目指したものではない。男女の生き方を主軸に据えた主人公の半生記である。シドニー・ポラック監督は、一九三四年生まれで、青春時代に「赤狩り」を耳にしたのであろう。三〇代の初めころから監督として映画を作り始めたが、ニクソン政権下の一九七〇年代前半にあつて、冷静かつ批判的な視点を打ち出して「マッカーシズム」の問題を描くには、未だ機は熟してはいない。したがって、その影響を受けた同業者の実情を正面から取り上げるのではなく、走馬灯の一場面のように扱うしかなかったであろう。しかし、第二次大戦前後と「赤狩り」の時代に青春時代を過ごした者たちの動向をうまく伝えている。

(2) マイク・ニコルズ監督『ハリウッドに口付け』(Postcards from the Edge, 1990)

この作品は、『追憶』の一七年後に発表された。映画『スターウォーズ』でレイア姫を演じたキャリア・フィッツァーの自伝的作品『崖っぷちからの葉書』(Postcards from the Edge, 1987)をマイク・ニコルズ監督が映画化したもの。

キャリア・フィッツァーの両親は、歌唱力を備えた映画女優のデビー・レイノルズが母親で、父親が一九五〇年代始め、TVの人気アイドルでポップ・シンガーでもあり、エリザベス・テーラーなど数々の女性と結婚と離婚とを繰り返したエディ・フィッツァーである。キャリアは『スターウォーズ』以降、映画女優としては落ち目となり、気乗りのしない役割しか回ってこない。ドラッグや飲酒に浸る生活となる。そんな娘の姿を見かねた母親が、ハリウッドで生きていく決意を語り聞かせる話題の中に、「赤狩り」時代のハリウッド映画人の、とりわけ女優の生息が引き合いに出される。当時は、どのような雰囲気であり、人々はどのような反応を示したのかを、母親の口を通して伝えられる。映画は自伝作品そのものではなく、キャリアはスザンヌ(メリル・ストリープ)、母親のデビーはドリス(シャーリー・マクレーン)など、名前や母親の立場など若干変更を加えてある。

この作品も、「マッカーシズム」そのものを捉えた作品ではない。「赤狩り」自体は、作品化の時点で、すでに四〇年もの時を経ている。ハリウッド人として生きる試練の一例として、暗くつらい時代の思い出が言及される。マイク・ニコルズ監督は一九三一年生まれであり、当時は二〇代の青年時代を過ごしていた。映画の制作者となつて、歴史の一駒となつた暗い話題に触れるには、時代劇として描くか、昔語りとして説き聞かせるしかなかったのだろうか。加えて、映画の制作時期は、第四一代大統領として、ブッシュがレーガンから共和党政権を引き継いだばかりの時期でもある。

残る二作品は、一方は植民地時代の魔女狩りを取り上げたものであり、他方は考古学者の冒険ファンタジーとしてアプローチする方法をとったものである。

(3) ニコラス・ハイトナー監督『クルーシブル』(The Crucible, 1997)

この作品は、米国の劇作家アーサー・ミラーの戯曲『坩堝』(The Crucible, 1953)を、作家自身の手で映画用に脚本化したものに基つき、ニコラス・ハイトナー監督が映画化したものである。一七世紀末、植民地時代のマサチューセッツ・セイラムで実際に起こった魔女狩り裁判を描いたドラマである。ミラーは、一九五〇年代米国の「赤狩り」批判として、この戯曲を書いたとされている。

この作品は歴史上の過去の社会が取り上げられているということもあり、稿を改め、別の機会に言及することにした。

(4) スティーヴン・スピルバーグ監督『インディ・ジョーンズ／クリスタル・スカルの王国』(Indiana Jones and the Kingdom of the Crystal Skull, 2008)

考古学者が、歴史上の秘宝を求めて繰り広げる冒険活劇シリーズのひとつである。大学で考古学を教えるインディアナ・ジョーンズ(ハリソン・フォード)が、今回は、「宇宙の神秘の力を解き明かす秘宝」とされる伝説上のクリスタル・スカル(水晶の頭蓋骨)を探し求めることになる。

発端は、一九五七年、インディ(アナ)がネバダ州で調査活動を行っている最中、ソ連軍の女諜報部員スパルコ(ケイト・ブランシェット)に拉致され、辛くも難を逃れるのだが、FBIから尋問を受け、共産主義者のレッテル

を貼られて赤狩りの対象者になってしまう。同僚のスタンフォース教授が辞職すると同時に大学を無期限休職処分になり、インディは「自由の国アメリカ」と呼ばれていた祖国の現状に失望し、国外に向かう。南米でその秘宝を発見し、それによりアマゾン奥地の黄金郷を追い求め、時空を超越した異次元の生命体を発見するのだが、結局はその生命体と共に秘宝クリスタル・スカルも消滅してしまう、というお馴染の展開。その間、ソ連のスパイらと追いつ追われつの冒険が繰り広げられ、インディの元・恋人のマリオン（カレン・アレン）と遭遇し、その子マット（シャイア・ラブーフ）が自分の息子であるという事態に発展し、やがてマットがインディの後を継承するおまけつきである。

スピルバーグ監督は、娯楽大作を次々に発表する傍ら、戦争（『シンドラーのリスト』）や黒人問題（『アーミスタッド』）などの深刻な映画作品をも手掛けている。今回の『インディ・ジョーンズ』ものは、『ジュラシック・パーク』などと並ぶ娯楽大作であり、その中で、直接的に「赤狩り」問題を展開するのではなく、一九五七年のアリゾナ州で、いまだ「赤狩り」の余波が残っている、という時代背景として用いられているのである。

このように、「赤狩り旋風」の関連作品は、それほど多いとはいえない。ましてやこの問題を直接取り上げた作品は極めて少ない。それだけ、映画界に与えた影響は甚だ大きかったことがうかがえる。

三 「赤狩り旋風」の主要映画

一九九〇年代に入り、ようやく「赤狩り旋風」を正面に据えた作品が登場する。ここでは、その代表作である

『真実の瞬間』を中心に取り上げることしよう。この作品では、連邦下院議会に設けられた非米活動委員会の「聴聞会」(hearing)の様子が活写される。召喚されたものは、弁護士を同伴したり、反証を提示したりすることも許されず、委員から一方的に共産主義者の活動について詰問されたり、共産主義者と思しき仲間を密告したりするよう迫られる。

(1) アーウィン・ウィンクラー監督『真実の瞬間』(Guilty by Suspicion, 1991)

時代は、赤狩り旋風まつただ中の一九五一年九月。主人公は、売れっ子監督デイヴィッド・メルル(ロバート・デ・ニーロ)。彼はフランスから帰国し、ハリウッドに着いたばかりのところ。帰国パーティーの席上、女優のドロシー・ノールン(パトリシア・ウェティグ)が、突然、シナリオ・ライターの夫ラリー(クリス・クーパー)を激しく問い詰める。夫が非米活動委員会に友人を共産主義者だと密告した、映画人としてあるまじき行為だ、というのだ。帰国早々彼は、アメリカ社会のただならぬ雰囲気を感じ取る。

デイヴィッドは、翌日、映画界の大物(タイクーン)とも言うべき二〇世紀フォックスの社長ダリル・F・ザナック(ベン・ヒアザ)から呼び出しを受ける。そこで弁護士のグラフ(サム・ワナメイカー)を訪ねよう言われる。行ってみると、デイヴィッドの名前が共産主義者を列挙した「ブラック・リスト」に挙がっている、代わりに誰か仲間を売ることと嫌疑を逃れるよう、弁護士から勧められる。しかし彼は、断固拒否してその場を後にする。

帰宅するとドロシーがFBIの権限により息子の保護権を奪われたことを知る。自らにもFBIの捜査官と思しきものの尾行がつく。次第に彼は、息苦しさを感じ始める。友人の監督ジョー・レッサー(マーティン・スコセッシ)は、逮捕を懸念してロンドンへ発つてしまう。デイヴィッドは仕事を奪われ、映画会社の経営者たちから、撮

影所への出入り禁止を申し渡される。B級映画の仕事すらなくなり、職を求めてニューヨークへ行く。しかし、そこでもFBIは妨害し、昔の恋人を訪ねてみても、彼は煙たがられてしまう。

デイヴィッドは以前、仕事のし過ぎで、妻ルース（アネット・ベニング）とは離婚していたが、息子のポーリー（ルーク・エドワーズ）を交えて、その後も親しい付き合いをしていた。こうした苦境に立たされた状況下で、彼の力になったのは、先の妻ルースだけだった。彼は再び三人で暮らし始める。

そんなある日、ドロシーが自殺まがいの不審死をとげる。友人のバニー（ジョージ・ウェンド）は委員会の呼び出しを受けたため、デイヴィッドの名前を密告させてくれと頼みにくる。デイヴィッドは悄然とうなずくしかないやがて、デイヴィッド自身も聴聞会に喚問される。しかしその席で彼は、友人が共産主義者だと告発することなど断固拒否する。先に喚問され証言を済ませ、会場の片隅に止まっていたバニーも、デイヴィッドの態度に賛同して前言を覆す。デイヴィッドは、弁護士同伴や反証も許されない、横暴な委員会の詰問に敢然と立ち向かう。委員会は怒声の飛び交う騒然とした場と化する。

この作品では、「赤狩り」の対象人物を記した「ブラック・リスト」の存在、弁護士などから嫌疑の追及を逃れるために密告を示唆されたり、非米活動委員会において強要がどのように実施されたりしたか、また、官憲の圧力を恐れたハリウッドの経営者たちが、監督や脚本家へ講じた撮影所への出入り禁止や自由な作品作りの自粛をどのように迫ったか、あるいはまた、身近な映画人たちが、自らの信条に照らし合わせ、やむなく国外逃避をする様子や聴聞会での審問のやりとり等々、実にリアルに描かれている。

それというのも、アーウィン・ウィンクラー監督が自ら脚本作成にあたって念頭に置いたのは、ジョン・ベリー（John Berry, 1917～1999）という実在のモデルが身近にいて、実情を知りえたからである。ベリーは、『恋愛時代』

(一九四七)や『迷路』(一九四九)などの監督作品を一一作ほど制作したばかりでなく、『ゴールデン・エイティーズ』(一九八八)や『ア・マン・イン・ラブ』(一九八七)などに出演した俳優としても知られる。また、「赤狩り」の時代に、非米活動委員会での証言を拒否し、ハリウッドから追放された映画関係者を扱ったドキュメンタリー作品を制作したため、自らも嫌疑の対象とされてしまう。そのためベリーは、妻子を残しフランスへと亡命する。亡命後、アメリカに帰国するのは一九六四年であるが、主要な活動拠点はその後もパリに置き、この『真実の瞬間』が完成して八年後に同地で他界した。

(2) フランク・ドラボン監督『マジエスティック』(*The Majestic*, 2001)

二〇〇一年に出されたこの作品は、「マッカーシズム」旋風が吹き荒れる一九五一年のハリウッドを採り上げている。フランク・ドラボン監督は一九五九年生まれであるため、当時の情勢を直接体感したわけではない。

作品の主人公は、新進脚本家のピーター・アプトン(ジム・キャリー)。手がけた新作がチャイニーズ・シアターで上映され、彼の前途は洋々のはずだった。ところが、迫り来る「赤狩り」に飲み込まれ、ピーターが非米活動委員会から共産主義者だと名指しされる。動揺した彼は、車の運転中に事故を起こし、川に転落してしまう。気づいたとき、ピーターは記憶喪失になっていた。場所は、西海岸の田舎町ローソン。助けた町の人々は、彼が第二次大戦に出征し、行方不明になったままの英雄ルークだと勘違いし、歓呼の声をあげて彼を迎える。そのままピーターはルークとして生きることになる。

息子の死に意気消沈していたルークの父親ハリー(マーティン・ランドー)も、彼を見て気力を取り戻し、長らく閉めていた映画館「マジエスティック」の再建に動き出す。ルークのかつての恋人アデル(ローリー・ホールデ

ン)も帰郷し、ピーターも彼女に惹かれ、ルークとしての人生を受け入れ始める。しかし、ピーターは次第に記憶を取り戻し始める。そんな折、FBIが彼の事故車を発見し、居所を突き止め、ピーターを逮捕する。彼は聴聞会に召喚されるが、臆することなく「赤狩り」批判を展開する。彼の態度は仲間の映画人から称賛され、映画界に復帰することになる。しかし彼は、ほどなくその立場を捨てて、アデルに会うためローソンを再訪する。町の人々から温かく迎えられ、ピーターは映画館へマジエスティックで働くことにする。

この作品は、赤狩り時代のアメリカを舞台にして、当時を再現しようとしているが、一九五一年の時点で、果たして聴聞会で公然と赤狩り批判を述べ立て、その後で、そのまま映画界で仕事を続けることができたろうか、疑問が残るところである。現実には、脚本家の多くは、仕事を断念するか、名前を変え、共産主義的な疑いを抱かせる作品作りを断念して生き延びるか、あるいは自己の自由な考えを表現するために、ハリウッドを去ったり、果ては国外に逃れたりする、切迫した情勢下にあったはずである。

しかし、ダラボン監督がこのような作品に仕上げたのには、二つの理由が考えられる。ひとつは、今日の観客に「赤狩り」について関心を寄せてもらうには、心温まるラブロマンスが必要であった、ということ。もうひとつは、ダラボン監督自身の特性という点もあるだろう。彼はこれ以前に、ステイブン・キングの原作を『ショーションの空に』(一九九四)と『グリーンマイル』(一九九九)として映画化している。⁽²⁴⁾こうした作品でも、主人公の神がかり的な執念で脱獄に成功する物語や囚人の秘められたパワーで病人を回復させるという奇跡の物語が、回想場面に盛り込まれていたが、この『マジエスティック』も同じように、超現実的な要素を加えた、回想的な作品作りがなされている。主人公が事故を起こして記憶喪失となり、小さな田舎町に迷い込む、というメルヘン的な仮構が施されている。作品における主人公の「自分探し」の物語とハリウッド映画人としての「赤狩り」再考とが、パラ

レルに仕組まれている理由が、それであろう。

(3) ジョージ・クルーニー監督『グッドナイト&グッドラック』(Good Night, And Good Luck, 2005)

二〇〇〇年代に入り、マッカーシズムがハリウッドを舞台にしたのではなく、メディア界に及ぼした影響を取り上げた映画が作られる。

それがこの作品で、マッカーシーに抵抗した実在のニュースキャスター、エドワード・R・マロー (Edward Roscoe Murrow, 1908-1965) を主人公にしたものである。映画のタイトルは、マローが番組の最初に述べる決まり文句に由来する。⁽²⁵⁾ 一九五〇年代の「赤狩り」の猛威が吹き荒れるアメリカをノンフィクション・ドラマで構成。テレビの黎明期であった当時の雰囲気醸し出すため、全編がモノクロ編成で、当時のマッカーシーの演説場面などドキュメンタリー・フィルムが挿入され、臨場感を高める工夫がなされている。煙草の煙が立ち込めるTVスタジオやスタッフ室が場面の大半を占める。

マッカーシズムの吹き荒れる一九五三年、ハリウッドの映画人ばかりでなく、アメリカの一般市民も、「赤狩り」に戦々恐々としている。そんな折、CBSテレビ局の人気ニュース番組『シー・イット・ナウ』(See it Now) のキヤスター、エド・マロー (デイヴィッド・ストラザン) は、ミシガン州空軍予備役のマイロ・ラドウロヴィッチ中尉が、「父親と妹が共産主義者だ」という内部告発があった」というだけで除隊処分されようとしている、との情報を入手。それを番組で取り上げる。

しかし、この報道が契機となり、プロデューサーや記者など番組スタッフがマッカーシー側から、威嚇の電話や尾行などの圧力を受けることになる。CBSの会長ベイリー (フランク・ランジェラ) は報道内容を支持し、翌五

四年、マローのスタッフは、マッカーシーが赤狩り追及の手を軍隊にまで広げた、その虚偽と策謀を番組で暴露する。これを見た視聴者から大きな反響を得る。一カ月後、マッカーシー側から反論がなされるが、世論は彼から離れ、以降、マッカーシーは次第に失脚の道をたどることになる。

作品は、ここから番組やCBSの存立にかかわるTV界の抱える問題へと移行する。ペイリー会長は、赤狩り報道にあつてはマローの番組を支持したが、広告主の顔色や政府からの圧力を懸念し、『シー・イット・ナウ』の番組スタッフの退社を促したり、放映時間枠の変更を命じたりする。また、視聴者の関心も別の話題に移り、時間をかけて同じ問題の諸相や根源を掘り下げる、継続的な報道の難しさが浮き彫りにされる。一九五八年、報道番組制作者協会のパーティの席で、マローはその点を指摘したスピーチをする。

クルーニー監督は、『グッドナイト&グッドラック』でプロデューサーのフレッド・フレンドリー役として登場し、マローのよき理解者を演じているが、自身はニュースキャスターの父のもとで、多くの時間をスタジオなどで過ごして育ったという。それだけに、当時のTV業界の事情がリアルに伝えられている。

冒頭にも触れたように、米国における「赤狩り旋風」(マカーシズム)が吹き荒れたのは、一九四〇年代後半から五〇年代のことに過ぎないのだが、その影響は長く続いた。ひとつは、東西冷戦時代の世界情勢がこの問題の背景にあること。また、米国の中心的な政治指導者がこれに深く関与していたこと、があげられよう。直接的な被害をこうむった政府関係者や映画人やジャーナリストたちは、これにより、拘束されたり、仕事の機会を奪われたり、国外退去させられたりするなど、多くの辛酸をなめることになった。映画業界はとりわけ、表現の自由を阻害される不遇の時期を迎え、娯楽路線をひた走ることになる。以降、映画作品において、「赤狩り」というアメリカ戦後

史の汚点を正面から取り上げることがしづくなかったし、できなかった。冷戦終結後の一九九〇年代になって、ようやくこの問題を取り扱った映画作品が出始めたが、それほど多く制作されてきたわけではない。今後も、この問題に関するすぐれた作品が出てくることを期待したい。

- (1) 【Wikipedia】「エリア・カザン」<http://jp.ask.com/wiki/>
- (2) 秋元英一・菅 英輝『アメリカ二〇世紀史』（東京大学出版会、二〇〇三年）、二〇六～〇七頁。
- (3) 有賀夏紀『アメリカの二〇世紀』下、中公新書、二〇〇二年、一九頁。
有賀夏紀「反共の嵐——マカーシー旋風とローゼンバーグ裁判」『資料で読むアメリカ文化史④』（東京大学出版会、二〇〇五年）、三三五頁。
- (4) 【Wikipedia】「非米活動委員会」(Un-American Activities Committee)
- (5) 有賀『アメリカの二〇世紀』下、二〇～二二頁。有賀『資料④』、三三六頁。
- (6) 【Wikipedia】「連邦捜査局」(FBI)
- (7) 有賀『アメリカの二〇世紀』下、二二頁。有賀『資料④』、三三八頁。
- (8) 有賀『アメリカの二〇世紀』下、二二頁。有賀『資料④』、三三六頁。
菅『アメリカ二〇世紀史』、二〇六頁。
- (9) 【kotobank】「国内治安維持法（マッカーラン法）」
- (10) 有賀『アメリカの二〇世紀』下、二二頁。有賀『資料④』、三三六頁。
- (11) 有賀『アメリカの二〇世紀』下、二二頁。菅『アメリカ二〇世紀史』、二〇七～〇八頁。
- (12) 【Wikipedia】「マッカーシズム」
- (13) 有賀『アメリカの二〇世紀』下、二四頁。有賀『資料④』、三三七頁、菅『アメリカ二〇世紀史』二〇八頁。
- (14) 堀邦維『ユダヤ人と大衆文化』ゆまに書房、二〇一四年、一三頁。
- (15) 佐藤唯行『アメリカのユダヤ人迫害史』（集英社新書、二〇〇〇年）、二三頁。
- (16) 堀『ユダヤ人と大衆文化』、一七九頁。

- (17) 陸井三郎『ハリウッドとマッカーシズム』(教養文庫、一九九六年、一五頁。
- (18) 井上一馬『アメリカ映画の大教科書』[下] (新潮選書、一九九八年)、二二七頁。
- (19) 【Wikipedia】「ハリウッドの一〇人」
- (20) 井上『アメリカ映画の大教科書』、二二九頁。
- (21) 陸井『ハリウッドとマッカーシズム』、二六五頁。
- (22) 陸井『ハリウッドとマッカーシズム』、三三一頁。
- (23) 【Wikipedia】「ヴェノナ計画」(Venona project) 参照。また、同年、ヴェトナム戦争時代に国防長官を務めたロバート・マクナマラが『回顧録』を出版し、ヴェトナム戦争を長期化させた原因についての見解を述べたのも、情報開示に向けた時代の風潮と合致していた。
- (24) 両作品に関して詳しくは、立正大学法制研究所「研究年報第一五号」所載の拙論『アメリカ映画の刑事収容施設』(二〇一〇年三月)を参照されたい。
- (25) 宮崎哲弥『映画三六五本』(朝日新書、二〇〇九年、七〇頁。

参照資料

ロバート・スクラー(鈴木主税訳)『アメリカ映画の文化史』[下](講談社学術文庫、一九九五年)、一章、一七六～二二一頁。
 芦刈いづみ・飯富崇生『時計じかけのハリウッド映画』(角川SSC新書、二〇〇八年、五九～六〇頁)。